

一顧建て、約千平方メートルの元鑄物工場のうち、約三分の一のスペースを彫刻家坂井公明さんなど五人にアトリエとして貸している。元工場を会場に、展覧会を開催することもたびたびだ。洗鉄を溶かすキューポラの跡が残る元鑄物工場と、現代美術の不思議な取り合わせ。天井が高く、がらんとした元工場で見ると美術作品は、美術館やギャラリーで見るとは違った趣がある。

祖父の代から続く鑄物工場を閉鎖したのは一九八〇年ごろだ。貸工場を考えていたところへ、不動産業者から紹介されてきた彫刻家二人が訪ねてきた。「賃料がもたらえるなら、誰に貸しても良かった。以来、一部を貸工場として、残りを広い空間と設備を求めて来たアーティストたちに貸し出すようになった。これまで

キューポラ跡残る 工場に現代美術

で延べ二十人以上がアトリエを借りた。

作品が売れ、お金に余裕ができたアーティストからは相場の賃料をもらっているが、名前が売れていない若手から賃料をもらうのが忍びない。「パトロンとは言えないけれど、アーティスト支援と考えないと続けれない」

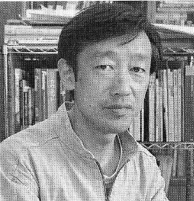
二〇〇二年には、近くの貸店舗を自らギャラリーに改装、多くの人の目に触れるよう発表の場を提供した。

バブル経済の真っ盛りごろ、アトリエを借りていた若いアーティストたちが賃金が手に入りやすいという理由で、工芸会社に転身していくのを見て残念に思った。若いアーティストには、作品づくりには打ち込み才能を発揮する機会が必要だとの思いが、アーティスト支援の原動力だ。

物作りの気風ある街で支援続ける

最初から現代美術に理解があった訳ではない。アトリエに立ち寄り、制作風景を眺めたり、アーティスト自身の言葉で制作意図などを聞くうちに興味が出てきた。都内の美術館主催の公開講座で、歴史や理論などを学んだ。「現代美術は直感では分からない。でも作り手に歩み寄り、メッセージが理解できた瞬間は最高」という。

物づくりの血が騒ぎ、時には、つなぎ姿で作品制作を手伝うこともある。付近では、幼いころからなじんできた鑄物工場が次々とマンションに建て替えられている。「川口は都会と田舎が入り交じった雑然とした街だけれど、物作りの気風がある」。これからのできる限り支援は続けていくつもりだ。



川口市生まれ。水道管の部品や工作機械部品を作る鑄物工場で遊んで育った。3代続いた鑄物工場を閉鎖し、元工場を「KAWAGUCHI ART FACTORY」として2002年には展覧会「第1回彫刻展」を開催した。元工場は29日から6月20日まで、市内4地区で行われる環境に関する国際アート展の日本展「Between ECO&EGO (エコとエゴのはざま)」の主会場となる。

この人と